
ConcealedMemory

神無月帝婁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Concealed Memory

【Nコード】

N3835A

【作者名】

神無月帝婁

【あらすじ】

とにかく逃げよう。いや、これは逃げじゃなくて旅の始まりだ。記憶をなくして途方にくれる女性いちわ。いちわに流されて自分の家に居候させる事になった沙希。どこかアンバランスな二人を描いた物語。

プロローグ

とにかく逃げよう。追いつかれないところまで、どこまでもどこまでも。あれ？逃げる？なにかから逃げるの？なんで逃げなければならぬんだらう。逃げる必要はどこにもないよね？そうだ、私は逃げてゐるんじゃない。これは逃走なんかじゃない。私は旅に出るんだ。長い長い旅に出るんだ。私は手に入れるんだ。私の宝を。だからそう、これは逃走なんかじゃないんだ。

「まてええええ！！！」

その声に振り向くと二人の男が私を追いかけていた。やばい！追いつかれる！こっちは自転車だつてのになんで追いつかれそうなのよ！あの人達足早すぎ！！もうすでに20分は走ってるっていうのに・・・恐ろしい体力だわ・・・っていうか本当に人間なのかしら・・・こうなったらプロジェクトC作戦しかないわね・・・！まずは曲がり角を何度か曲がって敵の目を欺く。そしてわざとらしく別れ道に自転車を乗り捨てる。あまりのわざとらしさに追っ手の二人は自転車がある道とは逆に向かう。逆に私は自転車が乗り捨ててある方の道に逃げる！こんな事もあるのかと、この日のために考えに考えぬいた作戦！予想通りお馬鹿な二人は私がいる方とは違う道に行ったようだ。完璧だわ。完璧すぎるわ、プロジェクトC！やつとまくことができた・・・まったく、しつこいにもほどがあるわよ・・・でも、これでやつと一歩踏み出すことができた。私を邪魔する人は誰もいなくなったわ。これで思うぞんぶ・・・

ゴン！

なんてことだ・・・勝利の余韻に浸りながら歩いていたら電柱にぶつかってしまった・・・うう・・・私ってドジだ・・・私はあまりの痛さにうずくまってしまった。額を抑えてうう・・・と呻く。幸先良いやら悪いやら・・・とにかく、うずくまっただけかもしれない。歩こう。私の旅はまだ始まっただけ

かりなんだから！って・・・あ・・・あれ・・・？た・・・立
てない・・・どうしちゃったんだろう・・・っていうか・・・目
の前が真っ暗くなってきた・・・あ・・・桜綺麗・・・
どうでも良いことを最後に考え、私はその場に倒れ込んだ。

第一話

あまりにも頭が痛くて私は目をさました。白い天井が見えた。見慣れない天井。

「ここは・・・どこ・・・？」

「お、目覚めました？」

私は起きあがって声がした方向に顔を向けた。若い女性が床に座っていた。さっきまで本を読んでいたのか、しおりを本に挟み、テーブルに本を置いた。ウェーブのかかった髪。少々きつそうな印象を与える顔だが、目は優しくそうだった。どうやら私はベッドに寝かされていたらしい。目覚めのない人。部屋の中を見回してみた。やはり目覚めのない部屋。

「あなたは・・・だれ・・・？」

「ああ、ごめんね。私は一宮沙希^{いちのみや せき}で、ここは私の部屋。あんたが道ばたで倒れてたから家まで運んだの。そのまま寝かせておくわけにもいかないし。本当は警察とか救急車とか呼ぶべきなんだろうけど、丁度携帯の電池がきれちゃってて連絡できなかったのよね。で、あんたの名前は？」

「あ、すみません・・・私は・・・」

名乗ろうとして私はそこで固まってしまった。なぜか自分の名前が出てこない。どうしちゃったんだろう・・・

「どうしたのよ？」

「あの・・・あれ・・・？えっと・・・あれ・・・？わからない・・・自分の名前・・・」

「え？もしかして、記憶喪失ってやつ？こんな所で寝かせておく場合じゃないじゃない。早く警察と病院いかないと」

そういうと沙希さんは外出をする準備を始めた。警察・・・病院・・・そっか・・・私記憶喪失になっちゃったんだもんね。なんかイヤだな・・・怖いし・・・それに、なんだかよくわからない

けど行つてはいけないような気がする。なんでだろう・・・？私、何か悪いことしたのかなあ・・・？

「ほら、なにしてるの？行くわよ」

「・・・イヤです」

私は警察と病院に行くのを嫌がる理由がよくわからない動揺がありながらも、しかしキツパリと拒否をした。沙希さんが怪訝な面持ちで私を見た。

「はあ？何言ってるの？あんた、今自分が置かれている状況わかってるわけ？」

「わかっています。わかってはいますけど・・・」

「・・・あのねえ、記憶喪失者の世話は医者と警察がすべき事なの。私はただの〇し。医者でも警官でもなんでもないの」

「わかつてます」

「なら来なさい。私がついていつてあげるから」

「イヤです」

「全然わかつてないじゃないの！」

沙希さんの優しそうな目がつり上がった。ものすごく迫力があつてかなり怖い・・・

「ごめんなさい・・・でも、なんかイヤなんです・・・病院とか警察とか・・・行つてはいけないような気がするんです。よくわかりませんけど・・・」

「はあ？なにそれ・・・？あんた、まさかヤバイことしたんじゃないでしょうね？」

「わかりません・・・」

「わかりませんって・・・あんたねえ・・・！はあ・・・まあ、記憶がないんじゃないでしょうがね・・・病院にもいかない、警察にも行かない、あんたは記憶が無くて自分が誰なのかもわからない。じゃあ、あんたこれからどうするわけ？」

そつだ・・・自分の家がどこなのかもわからない。警察、病院にも行かないなら私はどうすることもできなくなってしまう。私は

しばらく考え込んだ。その間沙希さんは何も言わず、じつと私を見据えていた。結局私の出した答えは・・・

「あの・・・私をここにおいてもらえませんか・・・？」

「はあ！？なんで私が・・・！」

「お願いします！」

「だって私はあんたと今日」

「お願いします！なんでもしますから！」

自分でもものすごくわけのわからない事を言っていると思う。道で倒れているところを助けて貰ったあげくに我が儘を言いたい放題いって、見知らぬ他人を家に住まわせてくれだなんて。しばらくの沈黙のあと、沙希さんは静かに口を開いた。

「わかったわ。あなたをここにおいてあげる」

「え？本当ですか！？」

「ええ。ただし、条件がある」

「条件・・・ですか・・・？」

条件ってなんだろう・・・勢いで「なんでもします」って言うてしまったけど、変なこととか要求されたらやだなあ・・・例えばまあ・・・ああいうこととか・・・

「そう。炊事、洗濯、掃除。家事全般をやること。それでいいなら・・・」

「やります！やらせていただきます！あの・・・ありがとうございます！」

私の変な妄想とは裏腹に、沙希さんの出てきた条件はとても簡単なものだった。沙希さんの目はいつの間にか元の優しそうな目に戻っていた。

「あの・・・もう一つお願いして良いですか？」

「ん？」

「私に、名前を付けてくれませんか？」

「え？名前？」

「はい。やっぱり、呼び名があつた方が良いと思うんです」

「そうね．．．うん．．．ポチ！」

「それって．．．たぶん犬の名前ですよね．．．？」

「むむ．．．じゃあタマ！」

「それは猫だと思います．．．」

しかも安直というかベタベタです。と、言おうと思ったがさすがにやめた。沙希さんは真剣に考えてくれているようだったからだ。単にネーミングセンスがないのだろう．．．沙希さんはうんうんとうなりながら考えている。時々「ハチ」やら「ピーチャン」などといった単語が聞こえた。それらは全部ペットの名前だと思えます。という突っ込みはこれまた自粛しておいた。それからしばらく考えたあと「あっ！」という声をあげて沙希さんは私を見て言った。

「”いちわ”っていうのはどう？」

「いちわ．．．ですか．．．？」

「そう。イチリンソウの花言葉って知ってる？」

「いいえ．．．」

「イチリンソウの花言葉は”追憶”。で、イチリンだと変だから、読み方を変えて”いちわ”。記憶を失ったあんなにはピッタリですよ？どう？」

「いちわ．．．はい。ステキな名前だと思います！」

居候も条件付きだけど了承してくれて、私に名前まで付けてくれた。沙希さんは一見きついような印象だけど、とても良い人みたいだ。

こうして私と沙希さんの、二人での生活が始まった。

第二話

「さて、始めますか！」

今日は月曜日。沙希さんは普通に仕事に出かけた。私の居候生活一日目。そして、家事初日。とりあえずは掃除から始めることにした。朝ご飯の片づけは「片づけは私がやりますからー」という私に沙希さんが「ああ・・・ついいつものくせで・・・」と答え、結局全部やってしまった。だからこれが私の初めての作業となる。私がどれだけ家事を行っていたかなどの記憶はないが、掃除くらいは誰でもできることだから、楽勝だろう。それにしても沙希さんの部屋はよく整理されている。そのおかげで、できることと言ったらまあ・・・掃除機をかけることくらいだろうか・・・私は押し入れから掃除機を引っ張り出し、プラグをコンセントに差し込んだ。そしてスイッチを・・・スイッチ・・・どこ・・・？それらしき物が見つからない。これが・・・？それらしきボタンを押してみる。シュルルルルルルル！という音を立てて、電源コードがすごい勢いで掃除機本体に吸い込まれた。どうやら違うらしい・・・これか？今度は本体の蓋が開いた。どうやら袋の取り替え時に使うボタンらしい。むむう・・・どこだあ・・・おのれ・・・掃除機のくせに・・・！人間様をバカにするとは良い度胸！解体してあげるわ！って・・・違う違う・・・これは私の物じゃない・・・電源スイッチどこだろう・・・と探していると柄の所に押しボタン式ではないスイッチを発見した。ON OFFと書かれている。ONにしたらブイイイイイイイイイイイイン！というすごい音を出して掃除機が作動した。掃除機のスイッチを付けるまでに10分もかかってしまった・・・ああ・・・私ってこんな・・・こんな・・・って、落ち込んでる場合じゃない！掃除掃除・・・気を取り直して掃除機をかけ始める。出だしはあんなだったが、スイッチが入ってしまえばこっちのもの！さくつと終わらせて

あげるわ！おほほほほほほほ！ガガガ！やっぱ私だつてやれ
ばできるのよ！つて．．．ん．．．？なんか今変な音がしたよ
うな．．．まさか．．．私変な物吸い込んだんじゃ．．．そ
う思い、なにか無くなっている物がないか探してみる。といつても、
沙希さんの物はすべてきれいにしまつてある。となると私の物だが、
私が所持していた物なんてなにも．．．．．あああ
あああああああああ！！！！！！！！！！大変なもの
を吸い込んでしまった．．．！取り出さなきゃ．．．私は大あわ
てで蓋をあけるボタンを押した。シュルルルルルという音を立て
てコードが本体の中に吸い込まれた．．．こっちのボタンじゃ
ない．．．私はもう一つのボタンを押して蓋をあけ、中から袋を
取りだした。袋の中を見ると、予想通りの物を吸い込んでいた。そ
う．．．昨日沙希さんから、買い物に行く時とかのためにもらつた
この部屋の合い鍵．．．ああ．．．私つて相当ドジなんじゃ．．．
．．．そうしてじつくり一時間落ち込んだあと掃除を再開し、無事に終
えることができた。時計をみたらもう十一時半になっていた。ああ．
．．．なんてこと．．．たかが掃除機をかけるだけで3時間もかか
つてしまうなんて．．．．．なんか無駄に疲れたような気がする．
．．．．．なんか眠くなつてきたな．．．．．ちよつとだけ仮眠をとるこ
とにしよう．．．

．．．．．う．．．．．？なんか夢を見ていた気がする。どんな夢
だつたつけ．．．？だめだ、思い出せない。まあいつか．．．
今何時だろう．．．？時計をみたらもう少しで6時を回る時間だつ
た。やばい．．．．．10分か20分くらい仮眠する予定がバツチ
リしつかり6時間以上も寝てしまった．．．夕飯の支度しなくち
や！冷蔵庫を開けて中身を確認する。白菜、えのきだけ、にんじん、
大根．．．おお、いっぱいある！よかった．．．とりあえず買い物
に行かずには済みそうだ。さて、どうしようか．．．．．なんだか今
日は冷えるから、お鍋にしよう。さて、いちわさんのドキドキクツ

キングのコーナー　まずはお野菜を切ります。ザクザクブシュ・・・イタイ・・・早速包丁で指を切ってしまうなんて・・・なんというお約束・・・うう・・・とりあえず絆創膏を貼って血を止める。それからさらに3回ほど指を切り、なんとか野菜を切る作業が終了した。あ・・・土鍋用意してなかった・・・そういえば土鍋ってどこにあるんだろう・・・まさかここまできてありませんっていうことはない・・・いいな・・・とりあえず一通り探してみることにする。どこだーどこだー・・・下の戸棚から探してみるが見つからない。となると上の戸棚か・・・身長の高い私にはちよつと高い位置だが、背伸びをすればなんとか届きそうだ。戸棚を開けると、奥の方に土鍋があるのが見えた。頑張つてそれを取り出そうとするが、手前に両手鍋があつてなかなか取り出せない。なんとか土鍋に手が届く。手が届いたことにホッとしたら力が抜けてしまった。そして・・・

ガシャガシャーン！という音を立てて戸棚に入っていた数個の鍋が落ちた。さらに

「ただい・・・ま・・・？」

ナイスタイミングで沙希さんご帰宅・・・

「・・・なにこれ・・・？」

沙希さんが無表情で私に尋ねた。

「あは・・・あはははははははは・・・」

もはや笑うしかない。笑って誤魔化すしかない・・・

「いちわさん、これはどういうことですか？」

ああ・・・沙希さんの顔が怒りに染まっていく・・・しかもなぜか敬語・・・こ・・・怖い・・・

「え・・・えつと・・・お鍋を作ろうと思って、土鍋を取り出そうとしたら・・・ガシャガシャーンって・・・」

「それで？」

「あ・・・えつと・・・ごめんなさい」

「よろしい」

そういつと沙希さんは散らかった鍋を片づけ始めた。どうやらさ
っきの怒りは私がドジをした事へではなく、笑って誤魔化そうとし
たことに向けられたものらしい。

「まあ、こんなことになってるんじゃないかって思ったしね」

グサツ！！沙希さんの言葉を受け、本日何度目かになる落ち込み
モードに私は陥った。うう……

第三話

日曜日。いちわがうちに来て一週間がたった。相変わらずいちわはドジばかりを踏む。しかし、それもだんだんと少なくなってきた。要領が悪いというか、ただやり方を知らなかっただけなのだろう。料理の仕方もわからなかったいちわ。元々料理も掃除もやらない子だったのか、それとも・・・記憶と共に忘れてしまったのだろうか？この一週間、テレビや新聞などで行方不明者の搜索願が出ていないかなどチェックをしているがそれらしい記事等はなかった。警察を恐れているという観点から犯罪者なのではないかという予想もし、犯人が逃亡している事件、事故などもチェックするようにしてみたが、そういった物は最近起こっていないようだった。まあ・・・そんなことできるような子には見えないけど・・・早くこの子の記憶を戻して、家族の元へと返さなければと思う反面、このままでも良いかなと思ってしまっている自分が最近現れた。だがそれは私個人の、一人よがりな想いでしかない。この子の親族、友人はとも心配をしているだろうから。でもせめて・・・この子の記憶が戻るまでは・・・

「ねえ、いちわ。今日買い物に行こうと思うのよ」

私は朝食の片づけをしているいちわに声をかけた。

「買い物？」

いちわが洗い物をする手を止めて私に尋ねてきた。

「そう。いろいろと買いたい物があるのよ。いちわも一緒に行く？」

「行く！」

とてもうれしそうにいちわがそう返事をした。それから「早く洗い物終わらせなきゃ」慌てて手を動かし始めた。と

「ガシャーン！」

という音がしたので台所を見ると床に割れた皿の破片が散らばっ

ていた。

「あゝ．．．うゝ．．．」

と、苦い顔をしていちわが呻いている。本日のお買い物リストに皿一枚と追加することが決定した。

落ち込みモードに陥ったいちわをなだめること30分。やっと立ち直ったいちわと私は片づけを終わらせて、外出の支度をして外へ出た。雲一つない快晴。絶好のお出かけ日和と言えるだろう。4月も中旬となった現在、桜は徐々に散り始めていた。もうちよつと時期が早ければ花見ということもできたであろうに。非常に残念だ。そんなことを考えながら私たちは近所のデパートへ向かった。

「ところで何を買うの？」

デパートに到着し、せっかくだから一階から適当に見て回ろうということになり、食器売り場を見ていた時にいちわが私に尋ねてきた。

「とりあえずここ一週間でいちわが割った食器類ね」

「あぐ．．．ごめんなさい」

「あとは、いちわの服とかかな」

「え？」

いちわがキョトンとした顔をして私を見る。

「あんた、荷物一つなしで倒れてたから、服それしかないでしょ？　しかも地味だし」

「地味．．．！？」

「だからいちわの服も．．．って、おゝい、聞いてる？」

いちわがその場に両手をついてへばり込み「地味．．．地味．．．」と呟きながら落ち込みモードに入った。他の買い物客からの奇異の目が突き刺さる。子供が私たちの方を指さして「ママー、あのお姉ちゃんなにしてるのー？」と母親らしき人に尋ねているのが聞こえた後に「し！見るんじゃないありません！」という声が聞こえた。あゝ．．．．．

「ちよつといちわ」

「そうよね・・・そうよね・・・沙希ちゃんなんかすごいオシヤレさんで華やかなのに・・・」

「おーい、いちわー」

「なんか私つてばこんな・・・」

「いーちわー!」

「私つて確かヒロインだったよね・・・?」

・・・全然聞いてない・・・30分くらい放置してれば勝手に立ち直るのだろうけど、さすがにここじゃそんなことできるわけがない。とにかく、褒めちぎるなりなんなりしてなんとかしていちわをたちなおらせなきゃ・・・と、いう風にするのが通常の私のやり方だが、落ち込みモードに入りたいいちわをこの方法を用いて立ち直らせるには10分ほど要する。いちわが落ち込みモードに入つてすでに5分が経過している。しかも心なしか野次馬ができあがつてきているような気がしないでもない。時は一刻を争う!他人のふりをして放置するというわけにもいかないし・・・結局出た結論は無理矢理いちわを起きあがらせてその場から全力で逃走するという、なんとも強引な手だった。このいちわの落ち込みモード、なんとかして治せないものだろうか・・・

デパートの階段。大概の客はエレベーター、エスカレーターを利用するためここに来る人は非常に少ないはずだ。予想通り誰一人としていなかった。デパート内の喧噪からやや離れたここで一息つく。いちわはまだ何事かブツブツと言って落ち込みモードに入っていた。まあ、ここなら一目にもあまりつかないし、放っておいても良いだろう。

「そうよ・・・そうよね・・・!それでいくしかないわ!!」

一体どんな経緯をたどつてそれでいくしかないという結論がでたのか解らないが(というか一体なにをするつもりなのか・・・)どうやらいちわの中で解決したらしい。

「やっと立ち直ったわね。まったく、あんたは人の話を最後まで聞かないで勝手に落ち込みモードに入って」

「ごめんなさい・・・」

「まあいいわ。とりあえず今日は、いちわの服とかを買おうと思ってるの。今まで私のを貸してたけど、私といちわじゃサイズも違うしね。いちわも自分のが欲しいだろうし」

「え？ いいの？」

「家事をしてるバイト代だと思って受け取っておきなさい」

「ありがとう、沙希ちゃん」

「それじゃ、こんなところに居てもしょうがないから行くわよ」

「うん！」

落ち込んだと思ったらすぐに笑顔になる。表情がコロコロと変わって本当に見ていて面白い。今までの私の交友にはなかったタイプ。こっぴうのも悪くはないと思う。私たちは衣類コーナーを目指して歩き出した。

第四話

一通りの買い物済ませ、私たちは帰路についていた。たかがデパート内をいろいろ回っているだけでも、テナント一つ一つじっくり見て回っていったら帰る頃にはすっかり夕方になっていた。二人共買い物袋を両手いっぱい持っている。今日日漫画やアニメでもあまり見かけない光景だと思う。あれやこれやと買っていたら気付くところという状況になっていた。本日使った金額は・・・考えない事におこう。でもまあ、私も楽しかったし、いちわも喜んでいるみたいだからまあいいか。そういえば今日の夕飯の事を考えていなかった。冷蔵庫の中には何もなかったはずだ。レトルト食品あまり好きではないから元からうちにはない。出前でも取るのか、それともどこかで食べていこうか・・・うん・・・

「ねえ、いちわ」

私はいちわに意見を求めるため声をかけた。が、しかし隣を歩いているはずのいちわの姿がそこにはなかった。振り返ってみたが誰も居ない。

「いちわー？」

私は誰も居ない空間に向かってもう一度いちわに呼びかけてみた。

「沙希ちゃん！こっちこっちー！」

かなり後ろの方の曲がり角からいちわが顔を出し返事をした。私はいちわの居る所まで行き、

「あんた、そんなところでなにやってんの？」

「あのね、猫がいるの！」

「猫？」

いちわの後ろをのぞき込むと一匹の猫が毛繕いをしていた。

「猫だよ猫！かわいい！！」

全体的に灰色っぽい色をしている。ロシアンブルーだろうか？いや、よく見ると尻尾が黒と灰色のしましまになっている。雑種のよ

うだ。首輪を着けていないが野良猫なのだろうか。そんなことを考えている私の傍らでいちわは猫を撫でている。猫の方もいちわに完全に気を許しているらしく、いちわにされるがままに撫でられ、気持ちよさそうに目を細めている。猫を撫でながらいちわが「にゃ」にゃ？うにゃ……。」と謎の言葉を発している。どうやら猫と会話(?)しているらしい。まったく、本当に面白い子だ。

「いちわ猫好きなの？」

「うん！沙希ちゃんは？」

「うん・・・嫌いじゃないけど私は犬派かな。なんか猫って自由奔放で気分屋だし」

「はあゝ・・・沙希ちゃんわかってないなゝ・・・わかってないよ沙希ちゃん!」

「なんで一回言うの……？」

「猫への愛っていうのは無償の愛なのよ!!」

「はあ……無償の愛ねえ……」

握り拳を作つてまで力説してくるいちわ。無償の愛と言われても私の猫に対する愛情が上がるわけでもなく……いちわは「時代は猫よ！ねえ、猫さ〜ん」と猫に語りかけ、また戯れ始めた。私はその姿をただ眺めていた。

「そうだ！沙希ちゃんも撫でてみなよ！」

いちわはそういうと猫の前からちよつとだけずれて私の入るスペースを空け、ほらほら！といって私を促した。私はいちわの言われるままにいちわの空けてくれたスペース、猫の前に座った。つまりはそう、私も猫に興味が無いわけではないのだ。野良猫は警戒心の強い動物だからそうつと猫の頭へと手を伸ばす。これだけ近くにいて警戒心が強い猫だとは思えないが、まあ念のために。猫に手が届くまであと５センチというところで猫は急に起きあがりピューッと遠くに走り去ってしまった。

「あゝあ……猫さん行っちゃった……」

いちわが心底残念そうに言う。

「まあ、猫だし、そんなもんだわね」

努めて冷静に私はそう言ったが、内心はちよつとだけショックだったりもした。そう、本当にちよつとだけ……

「きつと沙希ちゃんの猫さんに対する愛情が足りなかったからだよ！」

「そんなもんかしらねえ……」

「絶対そうだよ！」

なんの根拠があつてそんな自信満々に言えるのか……いちわは「やっぱり愛よ、愛！」などとまだ言っていた。でもまあ、根拠はなくてもなんとなく納得できてしまうような気がするから不思議だ。とりあえずいつまでもここにいてもしょうがないので私はいちわに「帰ろつか」といつて促し、再び帰路に着くために踵を返した。するとそこに黒いスーツを着て、サングラスをかけた二人の男が立っていた。私は無視して、半分いちわをかばうように男達の横を通り過ぎようとした。が、

「ちよつと待ちな」

と、呼び止められた。ああ……こんなのにからまれるなんてめんどくさい……

「ナンパならお断りよ」

「用があるのはお前じゃない」

そついうと一人がいちわの方歩み寄り、

「私たちと一緒に来て貰おうか」

と、言つて男はいちわの手を掴もうと手をを伸ばした。

「ちよつと！なんなのよあんたたち！」

私はそついうと男を止めに入ろうとした。が、もう一人の私の前に立ちはだかった。

「あの子はお前のようなヤツとは居られる存在ではないのだ」

そつ言つて私を取り押さえてきた。

「なにすんのよ……！」

私はとつさに身を翻し、私に掴みかかろうとしてきた男の鳩尾の

部分に思いつきり回し蹴りをくらわせてやった。男は低い呻き声を上げてその場に倒れた。

「き・・・貴様ああ!!」

仲間が倒された事に憤怒し、いちわに掴みかかろうとしていた男が私に襲いかかってきた。私は男の懷に飛び込み、男の腕をつかんで運動法則を利用し、男を投げ飛ばした。壁に背中から衝突し、男はそのまま動かなくなった。まあ、骨が折れたりとかはしていないだろう。合気道をやっていて良かった。

「いちわ行くよ!」

私はそういうといちわの手を取って走り出した。走りながらいちわが

「沙希ちゃんかつこいい!」

と、場違いな台詞をはいた。まったく、どこまでもマイペースな子だ。自分に身の危険が降りかかって居たことに気が付かなかったのだろうか・・・?走りながらふと買い物袋の事が気になったが、すぐに二人ともしっかりと両手いっぱい持っていることに我ながら少し呆れた。私たちはマンションまで全力疾走した。走るのに夢中で私は気が付いていなかった。いちわが浮かない顔をしながら走っていたことに。

第五話

自宅まで全力疾走した私達は二人して床に倒れ込んだ。が、暑さに耐えきれず私はすぐに起きあがり、窓を全開にする。夕暮れ時の涼しい風が部屋に入ってくる。それに満足した私は再び床に倒れ込んだ。二人ともしばらく何も言葉を発さないまま黙っていた。十数分ほどした所でお互いの呼吸も戻ってきたので私は口を開いた。

「なに・・・あれ・・・？」

さつき私達を襲ってきた二人組について、私はいちわに尋ねた。

「んー・・・わかんない」

まあ、当然と言えば当然か。いちわには私の所に来た時以前の記憶がないのだ。私の所に来てからは家事をしているだけでどこにも出かけることはない。買い物も一人で行かせるのが不安だったから私と一緒に二人で出かけるようにしていた。あの二人組、明らかにいちわをいちわと解っていて、いや、いちわの正体が、いちわが本当はどこの誰なのかわかっていて私達に接触してきた。しかも私のような人間とは居られる存在ではないと言った。今更になって不安に思う。この子は一体何だろう？どうして記憶をなくしたのか？どうしてあんなやつらに狙われているんだろう？考えれば考えるほどわからないことばかり。やはり何かの事件に巻き込まれたのではないか？逆にこの子が首謀なんて事はないだろうか？いや、そんなわけはない。まだこの子と暮らし始めて間もないけど、それでもわかる。この子は事件を起こすような子じゃない。そんなことができるなんて到底思えない。じゃああの二人はなんだったのだろうか・・・・だめだ、堂々巡りをするだけだ。でも考えずにはいられない。この子は一体・・・？

「風が気持ちいいねー・・・」

私が思考に耽っている隣でいちわが目を閉じて気持ちよさそうに言った。その脳天気さにちよつとむつとした私はいちわに詰め寄っ

た。

「あんた・・・あの二人について何も思わないわけ・・・？あなたの事知ってる風だったし、あんたの無くした記憶に関する事かもしれないのよ？」

「ん？うん・・・まあ、なんとかなるよ」

うん、なるなる。と、もう一度繰り返し、いちわはまた清々しい風に身を任せ、はあく気持ちいい・・・と呟いた。当の本人がこんな感じで自分ばかりがあれこれ考えていることがばかしくなり、私は不安を残しながらも思考を止めることにした。そして私もいちわ同様に夕暮れの心地よい風に身を投じた。それからふと思い出す。

「そういえば今日夕飯ないから」

「え！？なんで！？」

「買い忘れ。冷蔵庫の中にも何もなし」

「じゃあレトルト食品とかは！？」

「そういう物はうちにないってあなただって解ってるでしょ？」

「むう・・・じゃあどうするの？は！まさか今晚は抜き！？」

いちわがこの世の終わりであるかのような顔で大げさに叫ぶ。これで良い。いつものやりとり。こうやって今日の出来事は忘れてしまえばいい。

「あんたがそれで良いなら良いけど？」

「うう・・・沙希ちゃんが意地悪する・・・」

「ぷ・・・あはははははははは」

拗ね始めたいちわがおかしくて、堪えきれずに笑ってしまう。

「あー！沙希ちゃんひどい！笑った！」

私は懸命に笑いを堪え、ごめんごめんと適当に謝った。いちわはまだ不満そうな顔をしていたが、私が外食と出前どっちがいい？と聞くと途端に笑顔になり、間髪入れずに出前を選択した。

「なにがいい？」

「ピザ！」

またも即答するいちわ。その回答の早さにちよつとびつくりしていると、今日の新聞広告を取り出し、ピザ屋の広告を指してこれを食べたいって思ってたんだよ」と満面の笑みを浮かべた。私はいちわのご所望通りの物を注文する。そうだ、これで良い。これで良いんだ。こうやって少しずつ今日の事を払拭していけばいい。不安も気にならなくなるくらいに楽しい日々を送ればいい。この時の私は何故か楽観的で、この楽しい時間が毎日毎日、いつまでも続いていくと信じて疑わなかった。いや、不安を拭い去るために無理矢理不安要素を楽観視してただけなのかもしれない。この楽しい時間も、そうだったら良いという希望を現実の物にしようと躍起になっただけなのかも知れない。この楽しい時間が、いつまでもいつまでも……。願いつけていればいつか願いは叶う。そんな物は子供じみた思考概念、自己暗示でしかない。そうと解つていても、今はそれにしがみついていたかった。不安の種が発芽していませんようにと、ただ願うだけ。

ここはどこだろう？ 誰かの家の中？ 見たことあるような無いような…… 思い出せない。そこでふと思ひ当たる。そうだ、これは夢の中だ。と、いうことは私はこの場所を知っている。でもわからない。ここはどこであつただろう？

「桜」

後ろから声がしたので振り返る。そこには中年の男性が立っていた。風格から威厳がにじみ出ている。この男性も見覚えが……。ある……。？

「なんでしょうか、お父様」

自分の考えことに反して、私の口からはなんの躊躇もなくその言葉が出た。お父様……。この人は私の父親……。？そして「桜」という呼びかけに答えた私。私の本当の名前は桜……

「学校を自主退学してきたそうじゃないか。一体どういつつもりなのだ？ 大学も出ずにどうするっていうのだ？」

「別にどうというつもりはありません。ただ、私はお父様の敷いたレールの上を走りたくないだけです。私は私の考えで・・・」

「生意気を言うんじゃない！お前のような世の中を何も知らないような子供が考えて行動ができるほど世の中は甘くないのだ！お前は私に従っていれば良いのだ！お前の行動は浅はかだ。学校を中退するなど、綾小路家の恥だ！」

「綾小路家の規定など関係ありません！私は私の道を道を歩みます！」

「だからそれが浅はかだと言っているのだ！何度言えば解る？お前はただ私の言うことに従っておれば良いのだ！」

「それがイヤだと言っているのです！」

「・・・そんなに我を貫き通したいと言うのなら、この家から出て行きなさい。勘当だ」

「わかりました、出て行きます。二十一年間ありがとうございました」

それだけ告げて私は踵を返し、家を出て、愛用の自転車にまたがり走り出した。どこへ行くという訳でもなくただ闇雲に。しばらく走った所でお父様の秘書の人と執事の人私が私を追いかけてきた。

「桜お嬢様！」

「桜様、お戻り下さい！」

あの二人が追いかけてきたと言うことは私を連れ戻せというお父様の命令が下ったのだろう。自分から出て行けと言ったくせに。私は二人を無視して、速度を上げて自転車を走らせ続けた。この先にある、誰に強制されたわけでもない自由な自分の人生を夢見て。桜の咲き乱れる街頭を走り抜けた。視界に薄い靄がかかっていき、夢はそこで終わった。

第六話

なんだか悪い予感がした。言い知れぬ胸騒ぎ。虫の知らせというやつだろうか？昔から悪い予感によく当たる人だった。当たって欲しくない事に限って特に。今の私にとって良くないこと。思いつくのは一つだけ。昨日からの不安感の延長だという打算的な考えは今の私にはできない。今日は仕事は休むことにしよう。

なんだかいちわの様子がおかしい。食事をしている時も後片付けをしている時も、いつもならいつもなら話をしたり、騒いだりしているのに今日は妙に静かだ。おかしい・おかしい・昨日から歯車が狂ってしまったようにそこにあつた日常が変わっていく予感。いや、単にいちわの体調が良くないだけなのかも知れない。ほら、顔もなんだか微妙に強張っているようだし、心なしに顔色も良くないように見える。そんな打算的で良いのか私？そうやってそこにある現実から目を背けようとしているのではないか？

「どうしたのいちわ？」

「え？」

「なんだか物静かだから。体調悪い？」

「うん・・・ちよつと・・・」

「だったら薬吞んでゆつくり寝なさい。今日は私仕事休みだから正確には休みではなく休んだのだが、その辺りは伏せておく。そんなものはどつちでも良いことなのだから。」

「そうなんだ・・・じゃあ、丁度良いかな」

「そうね。家事は私が全部やるから、あなたは大人しく寝てなさい」

「そうじゃなくて・・・」

そうじゃない？なにがそうじゃないんだ？いちわの言っていることの真意がつかめない。真意をつかもうと必死に考えようとする。それと同時に考えてはいけないと本能が告げる。そして迫り来る言

いようのない不安感。

「あのね、沙希ちゃんに大事な話があるの」

大事な話・・・大事な話ってなに・・・？いや、もう誤魔化すのは止めるんだ一宮沙希！もう、どんな話があるのか、大概予想はついているんでしょ？逃げるな。目を背けるな。それでも私の予想している事と違う事をいちわが話してくれる事を望んでいる。それはとても確率の低い事ではないか？それでも、わずかでも可能性があるのなら、やはりそれにすがりたい。

「話ってなに？」

自分の声が妙に重くなっている事が自分でもわかる。場の空気が一気に重くなる。私は今一体どんな顔をしているのだろう？平静を装う事ができているだろうか？いや、あんな声を出してしまったのだ。装う事なんかできているわけがない。

「あのね、私・・・」

そこでいちわは一度言葉を切った。私は何も言わずにいちわの次の言葉を待った。しばらくの沈黙。いちわが意を決したように口を開き、言葉を発しようとしたその時、玄関のチャイムが鳴った。こんな朝早くから誰だろう？立ち上がって玄関に出ようとするいちわを「私が出る」と一言言って制し、私は玄関に出た。チェーンはかけたままで、鍵を開けてドアを開く。そこには中年の男性が立っていた。

「朝早くから申し訳ありません。私、綾小路と申しますが、こちらにいちわという女性が居ると思うのですが？」

全身から血の気が引いていくのがわかる。居ませんか？ではなく居ると思うのですが？と言って訪ねてきた。これはもういちわがここにいることを確信している。この人は何者？

「お父様！」

いつのまにか後ろにいちわが立っていた。気配がまったくわからなかった。いや、それほどまでに私が呆然としていたのだろう。そんなことより、今いちわ・・・この人の事お父様って言った・・・

・？ということ、やっぱり・・・やっぱり・・・

「いちわ・・・あんた記憶が・・・」

戻ったの？そこまでを口にする事はできなかった。だが私の言おうとした事は伝わったらしく、いちわが小さく頷いた。ああ、やはり悪い予感当たってしまったんだ。こうしていちわの父親も迎えに来ている。そうだ、もう私達の二人での生活は終わりなのだ。

「桜、家に帰りなさい」

「今更そんな事を言うのですか？お父様が出て行けと言ったのではないですか」

いちわの父親がその言葉で黙ってしまう。沈黙が続く。その沈黙を破ったのは私だった。

「あの・・・とりあえず中にお入り下さい。ここ、マンションですし、立ち話もなんですから・・・」

そういつて私はいちわの父親を部屋の中に招き入れた。いちわはびっくりしたような顔で私を見て何かを言いたそうにしていたが、私はそれを無視した。

私の隣にいちわ（桜と言うべきだろうか？）、テーブルを挟んで向かいにいちわの父親（名を綾小路庄造というらしい）という位置関係で私達は座っている。庄造さんが自分の名前を名乗って以降、誰も口を開かない。かれこれ十分くらいはみんな黙り続けている。重い沈黙、重い空気。

「桜、家に帰りなさい」

その沈黙を破って庄造さんが口を開く。先ほどと同じ台詞。

「ですから、私は家には戻りません。そもそも出て行けとおっしゃったのはお父様じゃないですか」

「まさか本当に出て行くとは思わなかったのだよ」

「そう申されましても、私の意見は変わっておりません。私は私のやりたいようにやらせていただきます」

「だから、お前のやりたいこととはなんだ？」

「まだわかりません。でも、少なくともお父様の言うとおりに従っている事でないことだけは確かです」

庄造さんの顔が怒りに染まっていく。気分を落ち着けようと必死で息を整えているのがよくわかる。桜は表情を変えないままじつと父親の姿を見据えている。いつものような雰囲気はまるでない。ここにいるのは紛れもなく、私の知っているいちわではなく、綾小路桜なのだ。庄造さんが気分を整え終わると、考え込むようにまた黙ってしまった。だがすぐに意を決したように口を開いた。

「……わかった。そこまで言うのならお前の好きなようにするが良い。私ももう何も言わない。しかし、家には戻りなさい。いつまでも一宮さんのご自宅にお邪魔しているわけにはいかないだろう」

庄造さんはそう言うのと私に同意を求めるように視線を私の方へ移す。桜も私に視線を注ぐ。そんな事無いです。私は迷惑ではないです。からこの子はここに置いて上げてくださいと、言っただけでそんな眼差し。期待と不安の入り交じった視線。もちろん私だって桜と一緒に暮らしていきたい。あの楽しい毎日をいつまでも続けていきたい。

「そうですね、いつまでも居られても私も困ります」

自分の考えている事とは正反対の言葉が口について内心自分でもびつくりしている。しかし、その声色は冷静そのものだった。桜が目を見開き、驚いた顔を見せた次の瞬間一気にその顔を曇らせる。

「元々桜さんの記憶が戻るまでという話でしたし、こうしてお父様自らが迎えにいらしたのですから私が桜さんをここに置いておく理由はありません」

なんでこんな事を口走っているんだろう？私はこんな事を言いたいんじゃない。

「桜、支度をしなさい」

「ここに私の荷物はありません。何も持たずに出て行きましたから」

そう言つて桜は庄造さんの後に付いて玄関に行く。私も見送りを
するためにその後を追う。出て行く直前で桜は一度私を振り返つた。
「沙希ちゃん、この一週間ありがとう。どこの誰とも解らない私
をここに置いてくれて。凄く嬉しかった。沙希ちゃんが付けてくれ
た「いちわ」っていう名前もすごく好きだった。たったの一週間だ
ったけど、すごく楽しかった。ずっとこんな時間が続いたらって思
つてた。失敗ばかりで沙希ちゃんに迷惑かけてばっかだったけど、
いつかテキパキとなんでもこなせるようになって、沙希ちゃんをあ
つと言わせたいって思つてた。でも、それはもう叶わないんだね。
仕方ないよね。沙希ちゃん、本当にありがとう。楽しかった」
桜はそう言つて踵を返し歩き出そうとする。

「桜！」

私はつい呼び止めてしまった。なんと叫ぶべきなのか、そう言う
事は何も考えないまま。私は、何を言うつもりなの？桜はもう一度
振り返つた。桜はちよつと怒つたような顔をしていた。私はその顔
に罪悪感を感じた。そうだ。私は桜に怒られて当然なのだ。桜のあ
の助けを求めるような視線を無視したのだ。私は桜を見捨てたよう
な物なのだ。

「沙希ちゃんには・・・桜じゃなくて、いちわつて呼んでほしい
な」

しかし、桜から出た言葉は予想もしていないような物だった。「
いちわつて呼んでほしい」・・・か

「うん、解つたわ桜・・・じゃなくて、いちわ」

そういうといちわは微笑んだ。その微笑みはぎこちなく、笑みよ
りも寂しさの方が多く滲み出ていた。

「なに？沙希ちゃん」

私もいちわと同じ気持ちだよ。私もいちわと一緒に暮らしてい
たい。ずっと二人で楽しい時間が続いていたらって思つてたよ。
そう言いたい。でも言えない。さっきいちわの助けを求めるような
視線を裏切つたじゃないか。それなのにこんな事を言うのはムシが

良すぎるのではないか？むしろ、そんな言葉は真実味を持たない、ただの社交辞令的言葉としていちわには受け取られるだろう。いくら私が本心だと言ったところで、さっきの私の台詞から考えれば当然の事。私はなんで・・・どうしてあんな事を言っただろう。悔やんでも悔やみきれない。いちわが私の言葉を待っている。何か・

・早く何か言わなくては・・・
「・・・元気でね」

「うん」

他にも言うべき事がいろいろあるだろうに・・・私にはそれだけしか言う事ができなかった。庄造さんが「桜」といちわに呼びかける。いちわは踵を返し、歩み出す。最後にいちわはもう一度振り返りこついた。

「ばいばい、沙希ちゃん」

今度は私はなにも言う事ができなかった。いちわが遠ざかって行くのをただ黙って見ている事しかできなかった。

エピソード

「ねえ、いちわ今日のお昼・・・」

そこまで言って思い出す。そうだ、もうここにはいちわは居ないんだ。すっかり二人での暮らしが自然になつていたため、つい声をかけてしまう。一人に戻って思い知る。いや、解っていた事だ。いちわと二人で暮らしていた事はなんと楽しい事だっただろう。そういえばいちわ、昨日買った服とかも全部置いていったな。今度届けてやろうか、なんてことも一瞬思ったが、いちわの実家がどこなのかを聞いていなかった。こちらからは何もできない。いつかいちわがここに来た時の為に大切にしまっておこう。そう思うが、そんな日は来ないのではないかとも思っている。でも捨てきれない。それはつまりいちわとの思い出を捨てる事になる。そんなことはしたくなかった。その時携帯が鳴った。一瞬いちわからではないかと期待するがディスプレイを見てそんな淡い期待も一瞬で消える。父からだった。

「もしもし？」

「私だ」

父はいつものように声を低くして大好きな刑事物ドラマの俳優の物真似をしている。いつもの事だが今の私にはこの父のお遊びが腹立たしくてしょうがなかった。こっちの気も知らないで・・・

「なに？」

私は思いきり不機嫌な声で対応した。よくよく考えれば父が私の心情を察せるわけもないのだから八つ当たりも良い所だ。

「お前次の日曜は何か用事が入っているか？」

父は明らかに不機嫌な私の声を聞いてもなんとも思わないようだ。相変わらずのマイペース。これもいつものこと。私が不機嫌であるうが上機嫌であろうが構わないのだ。それでもまあ、不機嫌になっ
ていてもしょうがないので、努めて平静を装って父との応対を続け

る。

「空いてるけど、なに？」

「うちの会社との提携会社社長さんたちとパーティをすることになったね。お前にも参加してもらいたいんだ」

私の父は会社をいくつか経営している、いわゆる大企業の社長だ。だからこういった提携会社の人とのパーティというのはよく開かれる。私は社交辞令全開なああいう空間は好まないのだが、断り切れずに私もたまに参加する事になる。今回も先に予定を聞かれて、しかも空いていると答えてしまっている。今更やっぱり予定が入っているととも言えないので承諾するしかない。私に時間と場所を告げると父は早々に電話を切った。いつまでもこんな滅入ってるのも私らしくないし、気分転換にもなるだろう。イヤな気分になるだけかもしれないけど、それでも、今のこの気分を紛らわせる事はできるだろう。

日曜日、私は指定された場所に時間通りに到着した。

「ごきげんよう、沙希さん。お美しくなれましたね」

「篠崎のおばさま、ごきげんよう。おばさまも相変わらずお美しいでございますね」

精一杯の作り笑いを浮かべて社交辞令をする。どうやらこの場には見知った顔がほとんどらしい。私は適当に顔見知り挨拶を済ませる。ごきげんよう、さん本日もステキなお召し物ですね。どちらのドレスですか？ステキな指輪でございますね。いえいえ、私などそんなに素晴らしい物ではございませんわ。やはり疲れる場所。社交辞令の嵐。私はひとしきり社交辞令をした後、では、ごきげんようと言ってその輪から離れる。どこかに休めるような場所はないだろうか？そう思い歩き出す。その時、誰かに呼ばれたような気がして辺りを見回す。しかし見知った顔はその周りにはなかった。気のせいかと思い、また歩き出そうとしたが、また誰かが呼ぶ声が聞こえた。

「沙希ちゃん！」

気のせいではない。確かに聞こえた。懐かしい声。懐かしい呼び方。まだそんなに時間は経っていないはずなのに、もう何年也会っていないかのような錯覚すら覚えた。私はこみ上げる感情を抑えきれずに、勢いよく振り返る。そこに立っていたのは・・・

エピローグ（後書き）

Concealed Memoryはいかがだったでしょうか？
前回のDeath Desireがちよつとバッドエンドっぽかった
ので、今回はハッピーエンドにしたつもりです。相変わらずの文章
力のなさに加え、今回は見事に沙希もいちわも動いてくれなくて大
変でした。

最後まで本作品を読んでいたいた皆様、ありがとうございました。
感想なんかをいただけたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3835a/>

ConcealedMemory

2010年10月26日03時20分発行